

魯迅における主奴の考察

かわかみ ひさとし

一

現像的にみれば魯迅は實に複雑である。人はその好むところにしたがつて彼を規定することができであろう。存命中の魯迅に對する評價は決してかんばしいものではなかつた、それは彼に向けられた嘲罵の數々、学匪・雜文屋・毒舌家・偽善者・墮落文人・ドンキホーテ・反動分子・變節者・封建遺物・買辦・虛無主義者等々左右から批難攻撃が集中されていたことから明らかである。魯迅に對する正しい評價が定つたのは彼の死後延安における毛澤東の魯迅逝世二周年記念の魯迅論によつてである。毛澤東はこの外新民主主義論その他でも魯迅に觸れているが、その政治的意圖は別として魯迅評價の正當性は今日ではわが國でも認められていることである。かつてわが國の研究者の間では魯迅を一言に規定することの困難さがかこたれもした。それは多くの偉大な人びとに屢々みられることであり何も不思議ではない、とくに魯迅のようにめまぐるしいと言うよりは狂瀾怒濤といった方が適切な時代において、多方面の学殖と熱火の活動的エネルギーをもち、迂餘曲折の道を辿つて現實社会のうちに自己を形成していつた人においては、それぞれの時期にそれぞれの様相を呈しており、物事を固定的靜止的にみる人にとつては確かに一言で規定する

ことに困難を感じずにはおかなかつたであろう。このことから個人主義と共產主義、虚無的悲觀主義と革命的樂觀主義、エゴイズムとヒューマニズム等々の矛盾に悩まされずにはおかなかつたのである。しかし魯迅があらわれとして如何に多様であり思想的に如何に轉變の過程を経てきたにしても、終始彼を貫いている一本の太い糸を見逃がすことはできない。中國の社会・思想の發展は辛亥革命以後でも若干の相異つた段階を展開している。この各段階における發展の特徴は魯迅思想の發展過程に反映されている。それは彼が現實の中國社会から寸時も游離することなく具體的に物を考へ行動した最も先進的な現實主義の知識分子であつたことから當然のことである。魯迅は單に文學者としてのみではなく政論家・史論家としても傑出していることは高く評價されている、その社会思想・政治思想の内容及び社会的意義は年と共に輝きを増しつつある。この點につきはじめて言及しているのは瞿秋白や毛澤東であろう、が何幹之は魯迅思想研究において「史論家・政論家としての魯迅は未だ普遍的觀點にはなつていないが、彼の作品中の歴史問題に關する部分の概括的研究からみると確かに傑出した政論家であり史論家である」と認めている。何幹之のこの著作は數年前のものであろうから當時は普遍的ではなかつたかも知れないが現在では普遍的觀點となつていよう、中國のすぐれた文藝評論家馮雪峯の近來の論文はそれを證明している。私がこゝで問題にしたいと思うのは、政論家史論家としての魯迅の眼が主奴の問題をいかにみたかということである。私は表題に考察という言葉を使つたが、これは適切ではないかも知れない、この言葉は書齋に閉ぢともつての瞑想思索を感じさせはしないかとあやふまれるからである。魯迅は秀でた思想家であるといわれるがそのことは抽象的思惟にのみ耽つていたことを意味するものではない、彼の著作のすべては社会的實踐の結實である。したがつて、彼の考察も抽象的思惟の過程によつてではなく、現實の中國社会において不斷の實踐のうちに自己の文学・思想・精神を鍛えあげていつた魯迅その人の考察だということである。魯迅は抽象的思惟から出發したのではなく、具體的事實から出發しているのである。魯迅に抽象的思惟

を求めるものは失望するだろう。

主奴とは支配するものと支配されるもの、壓迫するものと壓迫されるもの、ことであり主人と奴隸のことである。この問題は魯迅思想の根本問題であつて彼の著作の主要テーマであるが、彼の小説と雜文、とくに雜文において主要内容を構成している。魯迅が雜文に書いたものは、常に目、鼻、口、毛、手、足である、それらの綜合が一個の全體を形成している。その形成された全體とは何か。それこそまさに舊中國と中國人の眞の姿に外ならない。魯迅のすぐれた畫家としての眼は舊中國及び中國人を正確に映し出しているのである。政論家史論家としての魯迅が主奴の考察をくだしている個所は、ある時期にはまとまつた論文として、ある時期には目鼻口として表現されている。正確に言えば、一九二四・五年頃書かれた墳のうちの多くは論文といつてよいし、その他はすべて目鼻口として語られているのである。このことは一つの意味をもっている、というのは魯迅思想の轉變過程と連繫をもっていることである。魯迅思想が大體において、前期と後期に、進化論と階級論の立場に分けられることは衆知のとおりである。彼が前期において革命的小ブルジョア知識分子として現われてから終局において無産階級の觀點にたつた革命的ヒューマニストに至るまで経てきた遠く峻しい道は、そのまゝに中國の歴史・社会・文化を反映している。彼の歩んだ錯綜曲折の道は、半封建半殖民地中國の民族解放運動及び反封建運動の闘争の歴史に外ならない。主奴の問題は究局において中國社会の最も根本的な問題である反帝反封建の問題であり、とりもなおさず民族と階級の問題である。

私は進化論の時期を更に前期と後期に分け進化論から階級論への轉化過程をみながら彼の思想がいかに發展していったかを知りたい、その事は私が去年書いた「魯迅の雜文」の誤りや未解決の問題にも觸れることである。雜文は小説の發展ではあつたが思想はいかにみられねばならないかについて私は解答を與えていなかつたからである。

五・四運動のほど一年前一九一八年四月に發表された狂人日記が新文學運動上の貴重な收穫であることはいうまで

もないが、中國革命史上における意義も重要なものである。狂人日記が中國の歴史と傳統に加えた批判は當時の社会に嵐を呼び起したのであつた。

凡事總須研究，纔會明白，古來時常喫人，我也還記得，可是不甚清楚。我翻開歷史一查，這歷史沒有年代，歪歪斜斜的每葉上都寫着『仁義道德』幾個字。我橫豎睡不着，仔細看了半夜，纔從字縫裏看出來，滿本都寫着兩個字是『喫人』！（全集第一卷二八一頁）

中國古來の社会は表面上いかに美しく仁義道德を唱えたにしても所詮人が人を喰う社会であつた、これが魯迅の中國歴史觀である。彼はこの基本的觀點をその後の社会的實踐の經驗のうちに充實し豊富にし發展させてゆくのであるが、社会科学の論文としてではなくしにあくまでも思想性と藝術性の統一された小説のうちに文学として表現しているのである。したがつて、彼の思想性政治性を小説家の空談として輕視するのも誤りであるがまた學問的立場からの分析の科学的嚴密性の是非を批難するのも當らないであらう。魯迅はさらに封建社会における人間關係も人が人を喰う關係として分析する、封建社会においては到る處において、一方の側に人を喰うもの、他方の側には人に喰われるものしかない。人を喰うものは歴史上に堂々たる理由をもとめて彼らの人を喰う理論を根據づけ正當化するのである。即ち「易子而食」「食肉寝皮」これが昔からの方法であつた。李時珍の本草綱目にも人間は煎つて喰えるという文章がある以上、人を喰うことは罪惡のうちには入らない至極當然のことである。これが人を喰うものゝ思想であり、したがつてまた封建社会における支配的思想である。しかし人を喰うものは時として公然と自ら手を下すことなく隱密に彼らの正體を蔭蔽する、何故なら彼らは禍害を蒙るのを怖れているからである。それで一同連絡し網を張りめぐらして人に自殺せざるを得なくさせる、と同時に彼らは人を喰うものとしてまた人に喰われることも怖れている。

他們這羣人，又想喫人，又是鬼鬼祟祟，想法子遮掩，不敢直捷下手（全集第一卷二八二頁）

我曉得他們的方法，直捷殺了，是不肯的，而且也不敢，怕有禍祟。所以他們大家連絡，布滿了羅網，逼我自戕。（同前二八四頁）

自己想喫人，又怕被別人喫了，都用着疑心極深的眼光，面面相覷。（同前二八七頁）

こゝには人が人を喰う封建社会の各種の矛盾が表現されている、支配者と被支配の矛盾、支配者間の矛盾、しかも人が人を喰う支配者と被支配者の矛盾を封建社会の根本的な主要矛盾として大きな輪廓を畫いているのである。また支配者の恥すべき欺瞞的で巧妙な人を喰う方法及び彼ら相互の間における人を喰う權利獲得の爭奪と衝突が畫かれている。四千年來の中國の歴史を主奴の關係においてみた魯迅は進化論者としてすでに基本的には中國社会の階級的分析をなしている。そして支配者は何時の時代でも恥すべき方法をもつて人民を欺くということを教えているが如くである。初期の魯迅がすでにこの觀點をもつていたことは注目すべきことである。しかし同時に、國內の封建的なものに向けられた魯迅の眼は人を喰う外國には全然向けられなかつたのであろうか。魯迅は決して客觀的現實に眼を蔽うことなく何物も怖れずに現實を直視した人である、そして歴史的事實から教訓を学びつゝ成長していつた人である。一九一八年代の魯迅が狂人日記に見られる如く、反封建に全身心を傾けて戦闘しながら反帝の問題を採り上げていないことは反帝の問題を無視していたことにはならない。この點から魯迅思想の落後性を云々することは正當ではないであらう。もちろん、當時の社会情勢は、中國を滅亡に導くほど苛酷な二十一ヶ條條約を日本帝國主義が第一次大戰中に乘じて袁世凱に押しつけていた後のことであり、一部の軍閥官僚を除いて全中國人の胸に民族意識が昂まつていた時である。魯迅は故意に民族的壓迫から眼をそらしていたのであろうか。いや、逆に民族意識が昂揚していたからこそ啓蒙的進化論者として彼は益々封建的なものへの攻撃を強めていつたものである。私はそれを當時の雜文熱

風から證明できると思う。彼にとつては外國よりも自國中國人の魂の改造こそ先決問題であつた、第一大戰終了後中國の希望は入れられず多くの中國人が不滿を抱いていたとき、彼は書いている。

多有不自滿的人的民族，永遠前進，永遠有希望。

多有只知責人不知反省的人的種族，禍哉禍哉！（第二卷七八頁）

當時の魯迅はこれに類する文章を數多く書いている。

したがつて彼は民族性の改造を自己に課せられた緊急の任務と考えていたのである。これ即ち當時の魯迅が民族性の改造という思想啓蒙を通じて封建的矛盾を解決し、その基礎の上に民族の解放を勝ち取ろうとしていたことである。第二の理由は彼が歴史から教訓を學んでいたからではないかと思う。というのはアヘン戰爭以來中國は獨立國から半殖民地國家へと轉落したが、それ以後は外國の侵略と同時に中國民族の反抗が續けられてきた、滅洋と呼ばれた民族運動も國內の封建勢力を覆えさなにかぎり不可能であることを歴史は血の事實をもつて教えたのである。義和團は國內勢力を集中して外國の侵略に抗すべく反清運動をやめ却つて清政府を援助した、ところが清政府は義和團を排外に利用すると同時に外國の支配の下に彼らを殺戮したのである。この歴史的事實は、何よりも先に清朝政府をうち倒さぬかぎり中國の民主民族革命は遂行し得ないことを意味していた。辛亥革命はこのような要求のもとに行われたのである。しかし革命は名の上に終りその成果は軍閥に奪われ外國帝國主義は彼らを支持育成し依然として中國を支配していた。兩地書にはこの間における彼自身の心境が吐露されているはずである。研究的で何事も忽かせにせず充分な確信をもつに至らずして發表しては人を誤らすという彼の誠實さは、専ら觀察研究に従事せしめたのではないだろうか。封建社会との戦闘・封建社会における人間性の暴露と改造・封建社会への發掘工作これらが當時の彼の重大な任務であつたのである。したがつて彼が全然反帝運動を無視していたものとは考えられないであらう。

魯迅の「封建社会に對する批判と戦闘」及び「封建社会に對する發掘工作」はなおも撓みなくつゞけられる。狂人

日記においてその啓蒙主義進化論に基づき、封建社会の輪廓を書き出し人が人を喰う社会の改革方法として「子供を救え」と訴えて若きもの、新生に希望を託した魯迅は、阿Q正傳においてさらに前進する。阿Q正傳は馮雪峯のことはを借りれば、「魯迅前期の思想的特徴と藝術的特徴を最高度に表現した傑作であり、政論家魯迅と戰闘的啓蒙主義者魯迅の思想を十分に反映している」ものである。阿Q正傳の主題となるものは辛亥革命でありその失敗の教訓である。このことは、國民性の改造・個性の解放という啓蒙主義思想及び舊社会の病根剔抉から社会改革のコースを辿っていることであり、中國革命の道を搜し求めはじめたことである。

阿Q正傳において辛亥革命は農民革命として描かれている、即ち中國革命は農民革命だということである。狂人日記において封建社会を人を喰うものと人に喰われるものとの矛盾として、すなわち支配者と被支配者・壓迫者と被壓迫者の矛盾としてみた魯迅は、阿Q正傳において、人に喰われる農民の人を喰う貴族・官僚・地主およびその幫間への反抗と彼らの支配する社会の變革を暗示しているのである。これらのことは、魯迅が中國社会の主要矛盾を地主と農民、封建主義と人民大衆の矛盾として捉えていたことであり、中國變革の道を封建主義の打倒にみていたことであり、中國革命の源動力を農民においていたことである。したがって、啓蒙主義者魯迅は無自覺な農民を批判し叱咤し激勵し彼らが自己の奴隷性にめざめ立ち上ることを訴えているのである。

魯迅は農民の弱點をいかにみていたか。これ即ち阿Q正傳において典型として創造された阿Q主義である、自己を卑しき人も卑しき、自己を欺き人も欺く、自己の被害に對する健忘と敵に對する健忘、強者よりの壓迫に反抗し得ず弱者に向い鬱憤を洩らす、失敗したときに自ら慰める精神勝利法、異端の排斥、機會主義、傍觀主義等々。これらの性格は一連の關係をもっているが、最も主要なものは精神勝利法であり、一言でいえば奴隷的敗北主義と名付けられているものである。これが何千年にわたり王侯・貴族・官僚・地主によつて壓迫凌辱愚弄されてきた下層農民の性

格である。

阿Q主義は中國農村における最下級の傭農の性格であるばかりではなく、ありとあらゆる階級・階層に屬する人々の普遍的性格であり中國人の鏡である。このことから魯迅は普遍的な國民性の病根を問題にしているのであり、社会關係における矛盾對立を問題にしているのではないとみるのは誤りである。もちろんこういう普遍的性格の暴露と批判は阿Q正傳の主要テーマである、そして魯迅が階級論者でないことも明らかである。しかし何ら階級的意圖をもつていない魯迅が客觀的には階級的であることも明らかである。事實、魯迅は社会關係における矛盾對立をも描いているのである。阿Q主義を國民性の普遍的性格としてのみみることは正しくない、すでに馮雪峯のいうように「阿Qという流浪の傭農は阿Q主義と統一されているがまた區別されている」のである。阿Q主義は被支配者たる農民の精神であると同時に支配者の精神でもある。こういう普遍性に對し、馮雪峯はその歴史的社会的根據を魯迅が同時代に書いた雜文とくに墳の燈下漫筆をもつて究明している、しかし阿Q正傳ではこの問題への解答は未だ與えられていない。未莊の支配者たる趙太爺・錢太爺・秀才・假洋鬼子はひたすら自己の利益のために、いかにして阿Qを凌辱し收奪するかを考え、また彼らの幫間たる趙白眼・趙司晨は主人をいんぎんに助けてゆく、彼らは阿Qを壓迫し收奪するが彼が一度中興して都市から戻ると從來の態度を一變して畏敬の念をもつて迎える。しかしそれと共に阿Qを欺瞞し搾取しようとする努力は以前にもまして熾烈となる。が臆病な封建社会の支配者たちは阿Qの謀反には周章狼狽する。

『老Q』。趙太爺怯怯の迎上去低聲的叫。(第一卷三九七頁)

『阿Q哥，像我們這樣窮朋友是不要緊的……』趙白眼惴惴の説，似乎想探革命黨的口風。(同前)

この一二行のうちに、平素威勢を逞ましくしていた封建的支配者が一たび革命に直面して爲すところない眞面目

が遺憾なくあらわされていていよう。この革命は清朝を覆えすには成功したが骨は變りなく、趙太爺・錢太爺等の支配的地位は依然として揺がないばかりか、彼らは革命の果實を懷中に收め阿Qに革命を許さず譯のわからぬ罪名の下に阿Qを銃殺する。

こゝにおいて魯迅は辛亥革命を描いているのみならず、當時の封建的社會關係及び封建的支配者の下層農民に對する蔑視と恐怖をも描いているのである。被壓迫者たる阿Qは彼らに反抗するがまた屈服する、彼らは盲目的であり革命の目的を知らない、したがつて金銀財寶や女を夢みながら跟いてゆくのであり、或いは人が呼びに来るのを待つて眠りこけてしまふ機會主義者なのである。

以上は狂人日記と阿Q正傳——魯迅前期の代表的作品——のうちにみた主奴の問題に關する基本的觀點である。中國社會における最も本質的で最も基本的な矛盾である封建主義と人民大衆及び帝國主義と中國民族の矛盾、この二つは魯迅において有機的連繫をもつていない、これは進化論者としての彼の限界である。しかし何物も怖れぬ現實直視と進化論的唯物論の眼は社會の矛盾對立を見ている。魯迅は虐げられ壓迫され收奪されている人民に愛情を注ぎ、彼らに背を向けることをしなかつた。支配者の御用學者或いは幫間どもの如く「愛民如子」や「一視同仁」の美しいことばをもつて現實を故意に歪曲し隱蔽する無恥をもたなかつた誠實の人魯迅は、舊中國の腐朽頹廢と舊思想・舊習慣を容赦なくあばきだし、常に人民の立場にたつていたのである。

二

封建社會およびその思想習慣に對する攻撃と同時に、またその社會でつくり出された國民性の弱點をあばき出し

魯迅における主奴の考察

た魯迅は、さらにそれらを生み出す封建社会に對する剔抉工作をつゞける。阿Q正傳において未解決であつた問題——阿Q主義という普遍的な奴隸的敗北主義はどのような歴史的社会的根據をもっているかの問題——はその後の雜文において解答が與えられる。墳に收められている大部分のものがそれである。

魯迅は阿Q正傳において、阿Q主義を人民にみると共に支配者にもみた、しかし兩者の相互關係は未だ明かにはされずにいた。墳において魯迅は阿Q主義を抽象的な一般論をもつて民族の普遍的弱點として片付けるべきものでないことを證明する、この普遍的性格の根源は支配者それ自身のうちにある。一九二四年「論照相之類」に彼は書いてゐる。

Th. Lipps 在他那倫理学的根本問題中、說過這樣意思的話。就是凡是人主，也容易變成奴隸，因為他一面既承認可做主人，一面就當然承認可做奴隸，所以威力一墜，就死心塌地，俯首帖耳於新主人之前了。……用事實來證明這理論的最顯著的例是孫皓，治吳時候，如此驕縱酷虐的暴主，一降晉，卻是如此卑劣無恥的奴才。中國常語說，臨下驕者事上必詔，也就是看穿了這把戲的話。（第一卷一七一頁）

この理論をもつて魯迅は阿Q主義の發生が支配者より出でて人民に及ぶ過程を追求するのである。

中國人民は長期にわたる内外の野蠻な支配と侵略のもとに、かつて人間の價值を得たことなく、奴隸にも如かないことも珍らしくなかつた。しかも外來侵略者が中國の主人になると、從來の支配者は奴隸となり外來の強權者に仕えてきた。かゝる社会において人民は暫し奴隸たるに安んじているが、牛馬にも劣る境涯に甘んじ得られなくなつたときに、彼らは謀反を起したのである。これ即ち魯迅が想做奴隸而不得的時代、暫時做穩了奴隸的時代の名句をもつて一治一亂の中國社会の運動法則を道破したところのものである。中國社会はこの運動法則により螺旋形をえがいてきたのである。中國の封建的支配者は人間の厨房において外來の強權者に人肉を獻じてきた。北魏に、金に、元に、清

に、そして日本や西歐諸國に。外來侵略者によつて征服された從來の支配者はたゞに人肉を献上するにとゞまらずに女財寶も獻じ固有文明をもつて彼等の賞讃をかちとり彼らを陶醉せしめずにはおかない。外來侵略者による征服は中國の封建的支配者の屈服である。しかもこの屈服は容易に彼らを奴隸と化せしめる、それも嬉々として。我們極容易變成奴隸，而且變了之後，還萬分喜歡。

したがつて奴隸的敗北主義は他の誰よりもまず外來侵略者によつて征服せられた支配者にあらわれるものである。

我覺得中國人所蘊蓄的怨憤已經够多了，自然是受強者的蹂躪所致的。但他們卻很不向強者反抗，而在弱者身上發洩，兵和匪不相爭，無鎗的百姓卻並受兵匪之苦，就是最近便的證據。（第一卷二〇九頁）

こゝで魯迅は人民における阿Q主義發生の根源を封建的支配者による蹂躪によるものであり、封建的壓迫によるものであることを知らせている。封建的支配者の奴隸的敗北主義と精神勝利法はたゞに自己の敗北弱點に眼を蔽ひ自己満足に耽るのみならず、また人民の反抗精神を麻醉せしめるために利用されるものである。中國固有文明はこの點でいかに封建的支配者に奉仕し人民を壓迫するものであるか、魯迅は書いている。

不知道我的性質特別壞，還是脫不出往昔的環境的影響之故，我總覺得復讐是不足爲奇的，雖然也並不想誣無抵抗主義者爲無人格。……有時也覺得寬恕是美德，但立刻也疑心這話是怯漢所發明，因爲他沒有報復的勇氣；或者倒是卑怯的壞人所創造，因爲他貽害于人而怕人來報復，便騙以寬恕的美名。（第一卷二〇七頁）

中國的文人，對於人生，——至少是對於社會現象，向來就多沒有正視的勇氣。我們的聖賢，本來早已教人「非禮勿視」的了；而這「禮」又非常之嚴，不但「正視」，連「平視」「斜視」也不許。（第一卷二一七頁）

中國固有文明は人民を麻醉せしめるために封建的支配者の利器となるものであるが故に、また彼らの主人たる外國の侵略者にもこよなき武器たることを失わない。

但是讚頌中國固有文明的人多起來了，加之外國人。我常常想，凡有來到中國的，倘能疾首蹙額而憎惡中國，我敢誠意地捧獻我的感謝，因為他一定是不願意喫中國人的肉的！（第一卷一九八頁）

這文明，不但使外國人陶醉，也早使中國一切人們無不陶醉而且至于含笑。（第二卷二〇二頁）

しかし牛馬にも劣る忍耐強い人民も生死の關頭に至れば反抗せざるを得ない。したがつて封建的支配者は彼らの反抗を押えるべき方法を考へねばならない。

人民與牛馬同流，——此就中國而言，夷人別有分類法云，——治之道，自然應該禁止集合：這方法是對的。其次要防說話。人能說話已經是禍胎了，而況有時還要做文章。……要而言之，那大缺點就在雖有「二大良法」，而還缺其一，便是：無法禁止人們的思想。（第一卷一九一頁）

於是我們的造物主——假如天空真有這樣的一位「主子」——就可恨了：一恨其沒有永遠分清「治者」與「被治者」；二恨其不給治者生一枝細腰蜂的毒針；三恨其不將被治者造得既使砍去了藏着那思想中樞的腦袋而還能動作——服役。三者得一，闊人的地位既永久穩固，統御也永久省了氣力，而天下于是乎太平。今也不然，所以既使單想高高在上，暫時維持闊氣，也還得日施手段，夜費心機，實在不勝其委屈勞神之至……。（第一卷一九一頁）

支配者は集合を禁止し言論を抑壓することはできても人民が考へるのを禁止することはできない。支配者が被支配者へ、被支配者が支配者へと變じ、永遠の主人・永遠の奴隸が存しないことを歴史は教えている。次の文章をみよう。

殊不知我國的聖君・賢臣・聖賢之徒，卻早已有過這一種黃金世界的理想了。不是『唯辟作福，唯辟作威，唯辟玉食』麼？不是『君子勞心，小人勞力』麼？不是『治於人者食（去聲）人，治人者食於人』麼？可惜理論雖已卓然，而終於沒有發明十全的好方法。要服從作威就須不活，要貢獻玉食就須不死：要被治就須不活，要供養治人者又

須不死。人類陞爲萬物之靈，自然是可賀的，但沒有了細腰蜂的毒針，卻很使聖君・賢臣・聖賢之徒，以至現在的闊人・學者・教育家覺得棘手。將來未可知，若已往，則治人者雖然盡力施行過各種麻痺術，也還不能十分奏効，與果贏並驅爭先。即以皇帝一倫而言，便難免時常改姓易代，終沒有『萬年有道之常』；二十四史而多至二十四，就是可悲的鐵證。（第一卷一八九頁）

これはどういふことか。封建的支配者は分に安んじ己を守るといふ宿命論的理論の數々をもつて人民を窮乏に甘んぜしめ永遠に自己の勞役に服せしめ戰爭に驅りたて、ゆこうとするが、この殺人の毒針も蜂が幼蟲の神經球をさして麻酔せしめるが如くには効果がない。人民は麻酔をかけられているとはいへ、牛馬にすらなり得ないとき彼らは反抗せざるを得ないからである。したがつて、支配者が人民を屈服せしめ壓迫し猛威をふるうためには、人民の反抗を抑壓し自由を束縛し殺人の毒針をふるわねばならぬ。しかし他方において、支配者は人民の收奪の上に彼らの支配機構を築いているのである。こゝにおいて彼らは殺人と收奪のデレンマに陥らざるを得ない。いかに聰明な支配者と雖もこのデレンマから逃れることは不可能となる、彼らがなし得るすべての麻酔術をもつての懸命の努力も、虚しきものとならざるを得ない。古來くり返し行われてきた王朝交替の歴史的事實は何よりもこれらの事を證明するものではないか。したがつて、想做奴隸而不得的時代・暫時做穩了奴隸的時代は魯迅歴史觀の結論だつたのである。

ところで、人民被壓迫の歴史が、人民における阿Q主義發生の歴史であると共に、人民反抗の歴史でもあつた。しかもこの反抗は屢々鎮壓せられたことはまた一方において阿Q主義發生の根源となるものであり、他方では生存を求めて戦う不屈不撓の民族精神と中國の脊骨をも生み出したのである。この點については馮雪峯が阿Q正傳論において詳細に論じている。（人民文学四卷六期、新華月報二五）

こういう社会において、支配者と人民の奴隸的性格をみた魯迅は、こういう社会民族の病根は容易に癒し得ぬも

のとみてとつた。この認識から彼獨特の「塹壕戰」というねばり強い戰鬪方式や水に落ちた犬も打つべしとなす戰術があみ出されねばならないのである。

聽說剛勇的拳師，決不再打那已經倒地的敵手，這實足使我們奉爲楷模。但我以爲尙須附加一事，既敵手也須是剛勇的鬪士，一敗之後，或自愧自悔而不再來，或尙須堂堂地來相報復，那當然都無不可。（第一卷二五〇頁）

否則，他對你不『費厄』，你卻對他『費厄』，結果總是自己喫虧，不但要『費厄』而不可得，並且連要不『費厄』而亦不可得。所以要『費厄』，最好是首先看清對手，倘是些不配承受『費厄』的，大可以老實不客氣；待到牠也『費厄』了，然後再與牠講『費厄』不遲。（第一卷二五五頁）

この觀點は魯迅がいかにか具體的に現實に即して物を考へ實踐したかのこよなき例證であらう。觀念的で公式的な知識人が抽象的に民主主義を語るとき、眞にすぐれ徹底した民主主義者魯迅はフエアプレイの意義を充分認めていながらなおかつ中國社會の現實のもとには峻拒せねばならなかつた、そして暴力をあくまで否定しなければならぬ民主主義者が水に落ちた犬も打ちさらに逃ぐるを追つて打ちすえねばならないのである。これは何を意味するか。中國の民主主義革命が西歐のそれと全く異つた道を辿らねばならないことである、しかも中國社會において眞に徹底した民主主義者たるには暴力の否定者たり得ないということではないか。こゝにおいて最も現實的であつた魯迅は林語堂や胡適とは異り最も中國的で最も民族的な戰鬪者魯迅であつた。

こゝで一つの問題がある。中國社會および中國民族の變革工作における思想的領導者としての戰鬪的魯迅に虚無的な傾向の存することである。ある論者はこのニヒリズムを魯迅思想の本質的なものとしている、そういう人々から私は批難されねばならないであらう。「彼は異常に關心的に『中國の未來には砂漠が見える』と云つてゐた、さういふときの彼は慨嘆の口調であつた。」（魯迅の印象二五頁増田涉著）魯迅と親交のあつた増田氏に語つたこの言葉は魯迅

ニヒリズム論の有力な根據となつてゐるようである。この言葉を魯迅はどういう時、どういふ環境のもとで語つたものか、私にはわからない。また誰にでも語つていたものか、或いは特定の増田氏にのみ語つたのかどうか私にはわからない。それで私は何もいえないのであるが、この言葉を魯迅の個人的性格からのみ解釋するのは誤りではないかと思う。魯迅が孤高の性格をもち悲觀主義であつたことは事實である、しかし彼は戰闘か然らずんば死かの中國民族中國人民の戦いと共に自己を鍛えながら悲觀主義を克服していつたのである。したがつてこの觀點から「中國の未來には砂漠が見える」ということばも理解されねばならないと思う。魯迅にニヒリズムの傾向のあることは疑いない、それは熱風や野草において顯著である。熱風にはニイチエの影響があるとはよく言われることであるが、ニイチエを殆ど讀んでいずまた現在しらべる餘裕のない私はたゞ王士禛の說を引用しておくにとどめる。

尼采の哲學思想便正是代表着那最反動的德國貴族地主階級，和投降了貴族地主階級之後的資產階級的意識形態。他替貴族們說話，他說只有『優秀的』日耳曼的貴族才是高貴的民族，得天獨厚的上帝的選民，是主子；而其他的人們則是劣等民族，是天生的笨種，只配做奴隸。這規則則是永遠不變的，主子永遠是主子，奴隸永遠是奴隸。和尼采恰恰相反，魯迅出生在一九世紀九十年代的中國，這時，是中國大多數的人民正淪沒向半殖民地奴役生活裏的時代，……魯迅正是這廣大人民隊伍中的一個，他所代表的是半殖民地上的成千成萬的被壓迫被蹂躪的人民的堅強不屈的求生的意志。（魯迅傳二五四頁）

したがつて、外面的な文體や思想の斷片がいかに類似していても、主奴の問題について根本的に相反してゐる二人を混同することはできないのである。

野草はとくに興味深いものがある。野草は魯迅思想の轉變過程において重要な地位をしめてゐる。竹内好氏によれば「野草は小説と雜文の橋渡しになつてゐる。」したがつて私には進化論から階級論への橋渡しにもなるのである。

野草は一種の混沌であり、激しい戦闘者魯迅と共に絶望的虚無主義者魯迅もあらわしている。野草が書かれたのは小説の彷徨・雜文では墳の大部分・華蓋集・集外集の一部・兩地書などと同じく一九二四・五年代である。彷徨・墳・華蓋集等がそれぞれに異つた色合いをもちながら、封建社会およびその人間性・民族性・封建的支配者と人民を解剖し批判し或いは攻撃している點では一致しているが、野草はそれらを含みながらなお暗い影がからみついている。いつたい、この矛盾はどこから來るのであろう。それは魯迅が本質的に文学者と社会變革者（政治家）の矛盾的統一であるということからしか理解されないのではないか。魯迅がこの時期に戦闘者であると同時に暗い影を帯びたニヒリストであることは、政治家魯迅と文学者魯迅の矛盾のおりなす現象形態ではなからうか。なぜなら魯迅思想を一貫しているものは、主奴の問題に對する人民的立場であり文学者魯迅と政治家魯迅の矛盾であつて、戦闘者魯迅とニヒリスト魯迅の矛盾ではないからである。魯迅にニヒリズムの色が濃いといわれても、それは精々前期についてあつて後期にはまずみられない、また前期においてさえ戦闘的な面と虚無的な面をくらべれば、質量ともに前者が壓倒的に優勢である。雪葦の野草論はこの點をよく研究している。彼によれば、野草二十三篇のうち雪・好的故事・臘葉を除き他は二種に分けられる、第一種は過客・希望・影的告别・死灰・求乞者・墓碣文・頽敗線の顫動・死後・風箏の九篇、第二種は這樣的戰士以下秋夜・淡淡的血痕中・一覺・復讐・復讐（其二）・狗的駁詰・失掉的好地獄・立論・聰明人和傻子和奴才・我的失戀の計十一篇、死後はこの部類にも入れられるとなし、第一種を主として心境の陰影の一側面から自己を解剖したもの、第二種を暗黒勢力に對する攻撃としての戦闘的なものとなしている。さらに彼は野草と時代と場所を同じくして書かれた華蓋集・集外集の雜文を加えれば第二種のもものは第一種のものゝ九倍乃至十倍になるという比重からみて當時における魯迅の虚無感は内心生活における極少部分の波動にすぎぬと説明している。（雪葦著魯迅散論）

では戰鬪的魯迅に極少部分の波動にすぎぬとしても虚無感の存することは何に由來するのであろうか。魯迅をかくせしめたものには、朱女史との不幸な婚姻生活等の家庭の問題もあるが、それにもまして當時の社会情勢の下において彼がいかに戦つたかを知らねでならない。というのは、魯迅の虚無主義は、さきにも述べたとおり本質的なものではない。文学者魯迅と政治家魯迅の矛盾が半封建半殖民地中國において發展してゆく過程が必然的に彼を戰鬪者たらしめたのであり、そういう魯迅が壓倒的に強大で残酷な内外勢力に直面していたから彼の虚無的傾向もでてくるのである。いゝ換えれば魯迅のニヒリズムは彼の戰鬪者たることを裏から證明するに過ぎない。

五・四運動は中國革命を舊ブルジョア民主主義革命から新民主主義革命へと轉化せしめたものであるが、その事は國內封建勢力や外國帝國主義の打倒されたことを意味するものではなかつた。一九二一年のワシントン會議は帝國主義諸國內の矛盾を調整し、各國は直接的な侵略より封建軍閥を利用して地盤獲得を圖る間接的侵略へと移つた。袁世凱の死後北洋軍閥は皖系と直系に分裂し、馮國璋・曹錕・吳佩孚をもつて代表される直系は英米の勢力の下に、段祺瑞を主とする皖系は張作霖とともに日本に結び軍閥内戦がつづけられていた。連年の内戦に最も窮乏にさらされた農民の間には紅槍會のような武力反抗運動さえ起り、勞働者や中小資産階級の間にも不平等條約廢棄や軍閥内戦反對の要求が昂まつていつた。

アヘン戦争以來中國の革命者は民族の活路を見出すために奮闘してきた、しかし彼らは封建主義と帝國主義が中國革命の面している重大な二問題であることを明確にしていなかつた。中國ブルジョア民主主義革命最大の指導者だつた孫文すらも帝國主義が中國革命を援助してくれるという幻想をいだいており封建軍閥袁世凱と妥協して辛亥革命を失敗に終らせたのである。孫文は幾多の失敗・挫折を経て新しい途を求めていつた。一九二四年孫文は國民黨を改組し軍閥と帝國主義打倒のために連ソ・容共・工農の三大政策を採用した。

それは孫文の舊三民主義から新三民主義への飛躍を示すものであり、これは明らかに資産階級・小資産階級・無産階級・農民を含む廣汎な民主民族統一戦線であつた。一九二五年から二七年の北伐大革命はこうして準備されたのである。この時代において魯迅が相變らず進化論の立場から青年は老人に勝ると考え、老人の死滅によつて新中國の出現を夢み、中國の改造を反封建的なものにみていたことは、すでに歴史の流れにとり残されていたという外ないであらう。中國革命の激しい飛躍は一時的にせよ魯迅を乗り越えて進んでいた。しかるに魯迅はこれらの新興勢力と何らの連繋もなしに頑強な封建勢力の眞中に孤軍奮闘していたのである。かゝる環境のもと彼が孤獨・寂寞・懷疑・彷徨・苦悶せずにはいらなかつたのは當然である。新しい戦友は何處にいるのか、兩間餘一卒、荷戟獨彷徨という詩はそのまゝ彼の姿であつた。したがつて彼が從來の進化論的立場にたつてゐるかぎり、そして進化論を堅持してゆくかぎり、社会變革者としての魯迅の道はますます閉ざされるばかりであつた。彼が封建勢力への攻撃を強化すると同時に反帝を結びつけないかぎり、進化論者魯迅と社会變革者魯迅の矛盾はいよいよ深刻化するであらう。この間の消息は野草の過客をみれば判るはずである。

翁——我單知道南邊；北邊；東邊，你的來路。那是我最熟悉的地方，也許倒是于你們最好的地方。你莫怪我多嘴，據我看來，你已經這麼勞頓了，還不如回轉去，因爲你前去也料不定可能走完。

客——料不定可能走完？……（沈思，忽然驚起，）那不行！我只得走。回到那里去，就沒一處沒有名目，沒一處沒有地主，沒一處沒有驅逐和牢籠，沒一處沒有皮面的笑容，沒一處沒有眶外的眼淚。我憎惡他們，我不回轉去！（第一卷四九七頁）

地主によつて代表される封建社会をかぎりなく憎惡しながら新しい道を求めて旅人はゆく、道は遠く行先も定かではないがなお歩みつゞけねばならない彼の自畫像を我われは見得るのである。懷疑彷徨のうちにもなお撓みなく

前進し戦わねばならなかつた魯迅は兩地書や華蓋集にもみられるはずである。彼は轉換期に立つていたといふ得るであらう。彼が進化論的觀點をまもり新しい中國革命の道を見ず新興勢力と結びつくことをせず、ひたすら封建勢力との戦いを己が使命として反帝運動を結合しないことは、もはや戦闘者魯迅をして戦闘者たることを不可能にするものであつた。もし彼が舊社会への戦闘を放棄しないものならば、魯迅の階級論への轉化は必然的とならざるを得ない。私は「魯迅の雜文」において魯迅思想の轉變過程をこう書いた、「魯迅のように偉大で戦闘的なヒューマニストにとつて、階級的觀點にたゞぬかぎり戦闘を繼續できなかつたかどうかには疑問がある。たゞ常に被抑壓者の味方であつた魯迅が、抑壓者に對する憎惡から彼らと持久的に戦うべく轉換したことは確かである」。しかしこれはいまから考へると正しくない、彼はやはり階級的觀點にたゞぬかぎり戦いをつゞけることはできなかつたのである。

私は魯迅のニヒリズムについて道草をくつてきたかも知れない、しかしこの點を明かにすることは、魯迅をいかに規定しその中心的思想が何であるかをみるためには必要であつたからである。

三

いまや私は、過渡的な懷疑・彷徨の時代を脱して階級論者となつた魯迅が主奴の問題をいかにみ、またいかに發展させてゆくかをみるときがきた。

前期の魯迅が主觀的には國民性の病根として見たものも客觀的には階級社会の產物であり、終局においては人民を凌辱し壓迫する支配階級そのものの病根に外ならないものだつた。後期の魯迅は從來の思想革命から社会革命の立場にたつて階級と民族の問題をみてゆく、もはや彼は封建的階級關係のみを問題にしているのではない。こゝにおいて主奴の關係は複雑化してくる、壓迫者たる主人は封建勢力のみならず帝國主義が加わるからであり、しかも帝國主

義は人民を壓迫する封建勢力の主人として君臨してくるからである。この場合魯迅は、前期において封建社会およびその下にある人間性を剔抉したところの發掘工作に似たものを、帝國主義に對しては行つていない。これはさきにも述べたように魯迅思想の轉變過程と關係をもっている、春末閒談や燈下漫筆をもつて封建社会およびその運動法則を追求して喰い下つた魯迅は、階級論となるやもはやその追求を帝國主義に向ける必要はなかつた。すでに懷疑・彷徨の時代は去つた、たゞ彼の目的は二つの敵を隨時隨所に暴露し批判し攻撃し新しい道を指し示すことにおかれていたのである。これ即ち後期の魯迅が主奴の問題を目鼻口として表現している理由である。

一九二四年「主子容易變成奴隸」という支配者の本質を衝く理論が出されていた當時は、帝國主義と封建勢力の同盟が直接的武力侵略によらず傀儡を通して間接に政治・經濟・文化的に半殖民地中國人民を壓迫していた時代であつた。魯迅が帝國主義と封建主義の同盟の偽瞞をあばき彼らがいかに憎むべき民族の敵であるかを示しているのは、三閒集以後の雜文であるが、この時代に中國の社会情勢は變化してきた。一九二七年蔣介石のクーデター以後中國革命はまつたく様相を異にしてきたのである。毛澤東はこの時期を次のように規定している。

當着國內革命戰爭發展到從根本上威脅帝國主義及其走狗國內反動派的存在的時候，帝國主義往往採取上述以外的方法，企圖維持其統治；或者分化革命陣綫的內部，或者直接出兵援助國內反動派。這時，外國帝國主義和國內反動派完全公開地站在一個極端；人民大眾則站在另一極端，成爲一個主要矛盾，而規定或影響其他矛盾的發展狀態。（毛澤東選集第二卷七八八頁）

前期の魯迅が阿Q主義に主奴の問題を概括し阿Q正傳に最高度に發揚したものは、後期にいたつて新たな社会情勢および新たな觀點から様々の型態をもつて實證せられ發展せしめられる。

專制者の反面就是奴才，有權時無所不爲，失勢時即奴性十足。孫皓是特等的暴君，但降晉之後，簡直一個幫

聞；宋徽宗在位時，不可一世，而被擄後偏會含垢忍辱。做主子時以一切別人爲奴才，則有了主子，一定以奴才自命：這是天經地義，無可動搖的。（第五卷一三六頁）

このように、專政的暴君は一旦失敗して主人持ちとなると自ら奴隸をもつて任ずるものである。日本帝國主義が朝鮮をスプリングボードとして一九三一年九月滿洲侵略を開始したとき、國民黨ファシズムの奴隸的敗北主義を魯迅は次のように書いてゐる。

只要略有知覺的人就都知道：這回學生的請願，是因爲日本佔據了遼吉，南京政府束手無策，單會去哀求國聯，而國聯卻正和日本是一伙。讀書呀，讀書呀，不錯，學生是應該讀書的，但一面也要大人老爺們不至于葬送土地，這才能够安心讀書。報上不是說過，東北大學逃散，馮庸大學逃散，日本兵看見學生模樣的就鎗斃嗎？放下書包來請願，真是已經可憐之至。不道國民黨政府卻在十二月十八日通電各地軍政當局文裏，又加上他們『搗毀機關，阻斷交通，毆傷中委，攔劫汽車，攢擊路人及公務人員，私逮刑訊，社會秩序，悉被破壞』的罪名，而且指出結果，說是『友邦人士，莫名驚詫，長此以往，國將不國』了！

好個『友邦人士！』日本帝國主義的兵隊強佔了遼吉，礮轟機關，他們不驚詫；阻斷鐵路，追炸客車，捕禁官吏，槍斃人民，他們不驚詫。中國國民黨治下的連年內戰，空前水災，賣兒救窮，砍頭示衆，秘密殺戮，電刑逼供，他們也不驚詫。在學生的請願中有一點紛擾，他們就驚詫了！（第四卷三四九頁）

ここに示されているのは、たゞに國民政府の阿Q主義のみではない、日本帝國主義と世界帝國主義は氣脈を通じて仲間であること、また國民政府の陰險巧滑・外國帝國主義に對し媚を賣る卑屈な奴隸性と共に人民は立ち上つて内外の壓迫者と侵略者に反抗することもあらわしている。魯迅後期の思想が前期より急進的であることはこの一例によつて判ると思う。魯迅はまた世界帝國主義は中國人民の友人ではあり得ずむしろ敵であること、中國解放の主要力と

なるべきものは阿Q主義の國民黨にあるのではなく人民にあることを示しているのである。

同じく二心集の上海文藝之一瞥をみてみよう。

二十多年前，都說宋元璋（明太祖）是民族的革命者，其實是並不然的，他做了皇帝以後，稱蒙古爲『大元』，殺漢人比蒙古人還厲害。奴才做了主人，是決不肯廢去『老爺』的稱呼的，他的擺架子，恐怕比他的主人還十足，還可笑。（第四卷二九〇頁）

これはもちろん國民黨の蔣介石その他をいつているのである。かつて國民黨は民族の革命者であつた、しかし一九二七年民族革命に背いて以來國民黨は外國に對しては十全の奴隸性を發揮しながら國內の人民や少數民族に對しては勇武を輝かせていたのである。日本帝國主義の武力侵略に對し國民政府は容易く屈服し攘外より安内のスローガンをもつて内戰に没頭し、中國の國際管理を計畫している國際聯盟に哀願するとともに一面抵抗・一面交渉の國策をもつて侵略國と自國人民に對した。このことは戦わずして國土と人民を侵略者の蹂躪に任せることだつた。

魯迅のいうところのいわゆる硬刀子と軟刀子によつて、帝國主義は奴才と化した半殖民地中國の支配者を支配しながら同時に人民も支配する。この段階において奴隸的支配者はいかなる様相を呈するか。魯迅はこれを「文章與題目」において次の三つの場合に分析している、「安内而不必攘外」「不如迎外以安内」「外就是内，本無可攘」。

這三種意思，做起文章來，雖然實在希奇，但事實卻有的，而且不必遠徵晉・宋，只要看明朝就够。滿洲人早在窺伺了，國內卻是草菅民命，殺戮清流，做了第一種。李自成進北京了，閩人們不甘給奴子做皇帝，索性請『大清兵』來打掉他，做了第二種。至於第三種，我沒看過清史，不得而知，但據老例，則應說是愛新覺羅氏之先，原是軒轅黃帝第幾子之苗裔，遜於朔方，厚澤深仁，遂有天下，總而言之，咱們原是一家子云。……

前清末年，滿人出死力以鎮壓革命，有『寧贈友邦，不給家奴』的口號，漢人一知道，更恨得切齒。其實漢

人何嘗不如此？吳三桂之請清兵入關，便是一想到自身的利害，即『人同此心』的實例了。……（第四卷五四三頁）

この簡潔な文章は、從來の支配者が被支配者によつて取つてかわられその權力を失わんとしているとき、また外國の侵略者によつて屈服せられているかまたは屈服しようとしているときの支配者を洞察している。この文章の意味するものは、國內において人民を壓迫し奴隷となしている支配階級は對外關係においてたゞ二つの道しかとり得ないということである。即ち自己より弱い者（階級或いは民族）に對しては壓迫・侵略をなし、自己より強いもの（階級或いは民族）には屈服し投降するということである。もちろんこゝでは階級や民族のことばは用いられていないしそれに明清の事をいつている。しかし魯迅は常に昔と今・中國と外國を統一して書いていたのであり、個別性と一般性を統一しているのである。それで私はこの文章を明清のこととして理解すると同時に、また國民黨として受取らねばならない。この文章の附記には「安内與攘外」が原題になつてゐる。したがつて私はこゝでの壓迫者・被壓迫者・外國民族の侵入者をそれぞれ國民黨・人民・外國帝國主義として讀むことは誤りではないと思う。こゝには階級と民族に關する理論がある。こゝで私は、劉少奇の次のことばがいかに「文章與題目」と一致しその註釋ともみられるかを思わないわけにゆかない。

各國資產階級的民族主義，如上所述，當它在得勢的時候，就毫不猶豫地去侵略其他民族，但在另外一定條件之下，即在本國民族受到外國帝國主義強大進攻的時候，或在資產階級一階級或其中某一上層階級的利益是和本國人民的根本利益發生尖銳矛盾的時候，或本國人民起來威脅它的統治的時候，異民族的統治者或其他帝國主義者對它實施以威脅引誘，它就可以出賣自己的民族，而幫助異民族的統治者或其他帝國主義者壓迫本國的人民，以本國人民為犧牲，來達到它保護其財產・維持其政治地位或統治的目的。（論國際主義與民族主義四頁）

資產階級只有在對它有利的時候，它才拿出「民族主義」這個口號去煽動人民，而在對不它利的時候，它就毫無

民族的氣節，成爲民族的叛徒。（同前五頁）

民族の矛盾が階級の矛盾を超克しようとしていた時代、即ち日本帝國主義が滿洲を手中に收めた後あくなき野望をいよいよ露わにして全中國を併吞すべく華北に侵入していつた當時、魯迅はいかに階級と民族の問題をみていたか。

滿洲事變・上海事變と呼ばれる戦争の後、中國社会における階級關係には新しい變化が起つた。工農およびブルジョア階級は一黨獨裁の國民黨ファシズム反對に積極的となつたのみならず、自由主義的ブルジョアデイと蔣介石政權との矛盾も徐ろに表面化してきた。國民黨内の各派閥は各帝國主義間の矛盾の影響をうけて日本に對する態度も異なるものをもつていた。こうして國民黨内部にも新たな分裂がおきてきた。「内戦の停止による抗日」の世論が全國各階層の人々に擴まつていつたのである。しかし國民黨政府は、アジアの主人であり指導者でより中國の保護者と自稱する日本帝國主義の壓力に屈服し、内戦をつゞけると共に中國の領土人民を次々と侵略者に強奪殺戮せしめていた。日本帝國主義の武力侵略と國民黨ファシストの奴隸的敗北主義は、中國民族空前の危機をもたらししていた。

この時代において、魯迅は抗日民族統一戦線に對する自己の態度をあきらかにしている。

中國目前的革命的政黨向全國人民所提出的抗日統一戦線的政策（註），我是看見的，我是擁護的，我無條件地加入這戰線・那理由就因爲我不但是一個作家，而且是一個中國人，所以這政策在我是認爲非常正確的，……（第六卷五三三頁）

（註）中國の革命的政黨すなわち中國共產黨はすでに一九三四年抗日民族統一戦線の政策をかゝげ、帝國主義に反對した國奴たるを欲しないあらゆる中國人が團結し、反帝統一戦線のもとに一致して日本その他の侵略と戦うべきことを呼びかけていた。さらに一九三五年八月一日中共は「抗日救國のため全國同胞に告ぐる書」いわゆる八・一宣言を發表し、國民黨の内戦停止と抗日のため團結すべきことを要求し、全國人民が階級・黨派の區別なしに共同して國防政府と抗日連合軍を組織し、民族の危機を救うことを主張している。魯迅のこの文章は一九三六年に書かれているのである。

魯迅が全面的に抗日民族統一戦線を支持してそれを非常に正しい政策と見做していたことは、陳獨秀がこの政策を革命を裏切るものとなしていたのと對蹠的である。陳獨秀が連合戦線に反對するとき、魯迅はその説が中國を侵略者に賣り渡すものであると豫見していた。「論現在我們的文学運動」の中に魯迅の民族運動に關する理論をみる事ができよう。魯迅はこゝで文学運動を論じているのであるが、文学は生活現實社會の反映であるから中國の革命も反映しているのであり、したがつて文学運動を民族革命の社會運動として見得るわけである。

『左翼作家聯盟』五六年來領導和戰闘過來の、は無産階級革命文学の運動。這文学和運動、一直發展着；到現在更具體底地更實際闘争底地、更實際闘争底地發展到民族革命戰爭の大衆文学。民族革命戰爭の大衆文学は無産階級革命文学の一發展、是无産革命文学在現在時候的眞實的更廣大的内容。……因此、新的口號的提出、不能看作革命文学運動的停止、或者說『此路不通』了。所以、決非停止了歷來的反對法西斯主義、反對一切反動者的血的闘争、而是將這闘争更深入、更擴大、更實際、更細微曲折、將闘争具體化到抗日反漢奸的闘争、將一切闘争匯合到抗日反漢奸闘争這總流裏去。決非革命文学要放棄牠的階級的領導的責任、而是將牠的責任更加重、更放大、重到和大到要使全民族、不分階級和黨派、一致去對外。這個民族的立場、才真是階級的立場。（第六卷五八九頁）

この觀點は日本帝國主義が武力をもつて侵略していたとき、中國の各階級各黨派が一部民族の背叛者を除いて反侵略の民族戰爭に團結し得ること、しかもこの戰爭は無産階級にとつては一つの發展であり國內ファシストとの闘争の停止ではなくそれを内包した内容をもつこと、したがつて民族的立場のみが階級的立場であることを述べているのである。

かくて魯迅は民族主義者であり愛國者である。しかし彼の民族主義や愛國心は決して狹隘なものではない、彼は

自國の文化の短所も愚劣さもよく批判して中國の古書を讀むことに反對し敵國である日本の長所も學ぶべきことを公然と主張していた。私は「文章與題目」における魯迅が支配階級の民族主義およびその階級的基礎をいかにみていたかをみた。いまや彼の民族主義およびその階級的基礎を知ることができる。支配階級の民族主義すなわちブルジョア民族主義が自國の人民を犠牲にしなから他方では他民族を侵略し、逆に自己に不利になつたとき些かも民族の氣骨が存しないのとは全く相反し、彼の民族主義は自國の被抑壓人民を解放し牛馬にも劣る境涯より抜け出さしめるものであり、人民の立場に基礎をおくものである。したがつて、彼の民族主義は、外國侵略者を憎惡しながら外國人としても自國人民を輕視し外國の奴才となる自國の支配階級と戦うものであると共に、外國のいかなる種類の侵略とも斷乎として戦うものである。

こゝで魯迅が資本主義諸國と社會主義ソ連をいかにみていたか、即ち彼の國際主義をみねばならない。彼が資本主義諸國を憎惡していたことはいうまでもない。資本主義諸國は中國の封建勢力を支持溫存し彼らを傀儡となし、中國を永遠に人肉の厨房たらしめようとするものである。

對付下等華人的有黃帝子孫的巡捕和西崽，對付智識階級的有高等華人的學者和博士……這例子常見于中國的歷史上，後來的史官爲新朝作頌，稱此輩的行爲曰：『爲王前驅』！（第四卷五三〇頁）

殖民政策は一定保護，養育流氓的。從帝國主義者の眼睛看來，惟有他們是最要緊的奴才，有用的鷹犬，能盡殖民地人民非盡不可的任務：一面靠着帝國主義的暴力，一面利用本國的传统之力，以除去『害羣之馬』，不安本分的『莠民』。所以，這流氓，是殖民地上洋大人的寵兒，——不，寵犬，其地位雖在主人之下，但總在別的被治者之上的。（第四卷二九六頁）

資本主義諸國は殖民地の鷹犬を使つてその支配を維持し分に安んぜざる「莠民」にはいかなる殘虐行爲をも辭せ

ず、必要とあらば自ら出馬してその目的を達する。この事實を到る處にみてきた魯迅が、在資本主義的各國、什麼事件和種種文化上の進行、特別引起你的注意？という國際文學社の質問に對して、我在中國、看不見資本主義各國之所謂『文化』；我單知道他們和他們的奴才們，在中國正在用力學和化學的方法，還有電氣機械，以拷問革命者，並且用飛機炸彈以屠殺革命羣衆。と答えているのは當然である。事實の教訓によつて資本主義の何物かを知つた魯迅は、また事實の教訓によつて新興無產者のみが將來あることを確信するのである。

『宗教・家庭・財産・祖國・禮教……一切神聖不可侵犯』的東西，都像糞一般拋掉，而一個簇新的，真正空前的社會制度從地獄底裏湧現而去，幾萬萬的羣衆自己做了支配自己命運的人，（第五卷二七頁）

社會主義ソ連に對しこう書いているのは一九三二年のことである。魯迅のこの結論は、彼自身の不屈のねばり強い戰鬥と精力的な社會的實踐を経てはじめて到達したものであり、中國人民の長期にわたる解放運動の教訓を反映しているものである。これはすべての先進的中國人の歩まねばならなかつた道である。彼らはあらゆる理論・書物に眼を通し、世界の各國に學んだ、しかし帝國主義の侵略は中國人の世界に學ぶという心を打ち碎いたのであつた。したがつて

帝國主義和我們，除了牠的奴才之外，那樣利害和我們正相反？我們的膿疽，是牠們的寶貝，那麼，牠們的敵人，當然是我們的朋友了。（第五卷三一頁）なのである。

我們反對進攻蘇聯我們倒要打倒進攻蘇聯的惡鬼，無論牠說着怎樣甜膩的話頭，裝着怎樣公正的面孔。

這纔也是我們自己的生路！（第五卷三一頁）

中國の膏血を吸い、中國の土地を奪い、中國の人民を殺戮するものとして、魯迅が資本主義への憎惡を強めてゆくことは、彼をますますソ連へ近づかせることだつた。

かつて、ロシア文学から世界に壓迫者と被壓迫者の二種の人間のあることを一大発見として学んだ魯迅は、この世界には資本主義と社会主義の二種の國家しかないことを学んだわけである。三・一八事件の犠牲者である彼の女子学生の死が教えた教訓——別種の戦闘方法——とは實にこの道であつた。

もつとも、魯迅の向ソ一邊倒については、初期からとの説もある、しかし私は信じない。初期の魯迅が十月革命の影響を受けていることは疑いないし、十月革命に希望をもちそれに学ぼうとしていたことも事實である。

看看別國，抗拒這『來了』的便是有主義的人民。他們因爲所信的主義，犧牲了別的一切，用骨肉碰鈍了鋒刃，血液澆滅了煙燄。在刀光火色衰微中，看出一種薄明的天色，便是新世紀的曙光。（第二卷七六頁）

雪葦はこの熱風の「聖武」とともに、一九二六年書いた「爭自由的波浪小引」（集外集）の

俄皇的皮鞭和絞架，拷問和西伯利亞，是不能造出對於怨敵也極仁愛的人民的。（第七卷七二三頁）

平民總未必會捨命改革以後，倒給上等人安排魚翅席，是顯而易見的，因爲上等人從來就沒有給他們安排過雜麵。（第七卷七二五頁）

を引いてソ連の人民に学ぶこと、また十月革命後のプロレタリア獨裁に非難が集中されていたとき魯迅はソ連一邊倒であつたことをいつている。

しかしこの文章だけで向ソ一邊倒とすることはどうであらうか。これだけの文章から魯迅が十月革命およびその後の建設に懷疑をもつていたことを否定することができるであらうか。革命後のロシアに對し、全く反對の二つの意見が行われ、富貴の者が慘苦をなめ平民が擡頭したことを、恐らく正しいだろうという魯迅もお疑惑をいだきつゝあつたとみるのが正しいのではないかと思う。この事を私は、晩年の魯迅が

待到十月革命後，我纔知道這『新的』社會的創造者是无產階級，但因爲資本主義各國的反宣傳，對於十月革命

還有些冷淡，並且懷疑。（第六卷二五頁）

といつてゐることから主張するのである。魯迅が懷疑をかなぐり捨て、所謂同ソ一邊倒になつたのは晩年のことである、それ以前においては彼の虚無的傾向と同じく思想の混沌を示す以外のものではない。

私はこれまで、魯迅思想發展の三つの段階がそれぞれの具體的社会情勢とともに發展してきたことをみた心算である。革命の發展がまた彼に反映されてゐることもみたと思う。

魯迅思想發展の三段階には、それぞれの特殊性があるが、また彼の生涯、彼の思想を終始貫いてゐるものがある。それは彼の人民的立場である。壓迫者への憎惡と被壓迫者への愛情である。初期の魯迅が被壓迫者たる人民へ注いだ愛情はたゞ無智蒙昧迷信のうちに牛馬にも劣る生涯を終えて死を急ぐ人民大衆を憐憫に値するものとしてみ、彼らの解放をねがつたに過ぎなかつた。しかも人民の力に對する評價は低いものであつた。しかし後期の魯迅は人民の力への信頼と確信にみちみちてゐる。人民被壓迫の歴史が人民における阿Q主義と反抗の歴史であることをみた魯迅は、中國民族の自信と力は外國の侵略に奴才となり民族の背叛者となる支配階級にあるのではなく、不屈不撓の人民にあることもみたのである。人民は輝かしい戰鬪の歴史をもつてゐる、人民は自己の力と弱點を自覺し前途に希望をいだき、奴隸の秩序を打ち破らねばならぬ。これが魯迅の教えた道だつた。愚民と蔑げすまれた彼らも、實は支配階級の愚民政策により汚辱收奪壓迫され教育の機會さえ與えられなかつた結果にすぎない。人民の弱點といわれるものは、支配者の意識的計畫的な統治政策のもたらしたものである。私はさらに人民の智慧・創造力・實踐等々、人力の力に對する魯迅の認識が、いかに發展していつたかもみる心算であつた。がいまは略すことにする。たゞ最後にいふたいことは、「魯迅の雜文」にて、雜文を小説の發展としてみた私は、進化論から階級論への彼の轉化も、思想的には發展としてみねばならないということである。思想性と藝術性の統一としての魯迅文學が、兩者を切り離して一方

だけの進歩を云々することはできないはずである。中國においては、社会の解放も民族の解放も國民黨ファシズムの下ではとうてい行われることはできなかった。非國民黨的なもの、それが中國の救星だつたはずである。魯迅が思想的に選んだものはまさにその道であつた。中國の現實社会において魯迅には他の道を見出すことはできなかった。西歐に生れた魯迅はこれとは異つた道を歩いていたかも知れない。そういう點からも彼は中國적であり民族적である。

私は晩年の魯迅を思想の進歩としてみる立場であるが、このことは、彼をコムミュニストに仕上げたりすることではない。彼の思想が基本的にはマルクスレーニン主義の立場にあつたことはいうまでもない、そして彼の行動も或いはコムミュニストに近かつたかも知れない。しかし私は彼をコムミュニストと呼ぶには躊躇する、私は毛澤東の魯迅論をそのまま認めた上で敢て躊躇する。兎を殺した殘酷な黒猫が塀の上から傲然と見下ろしているのを見て、思はず本箱の青酸加里に眼をやるのが魯迅である。また、瑞金附近の農民たちを共產黨が殺しているという噂を聞いて、農民を殺すのはたといどんなことからでもよくない、調査の上本當なら中共に忠告する、ということを増田涉氏に語っている魯迅である。當時の中共は極左盲動主義の偏向があつたといわれる頃だから、噂だけでなく本當にあつたかも知れない。魯迅も暴力の肯定者である、しかし彼のそれは共產主義のそれとは本質的に異つてゐるのではないだろうか。彼が暴力の肯定者であるということは、中國の悲劇であり、また彼自身の悲劇である。誰が魯迅をコムミュニストと呼ぶか。魯迅はコムミュニストよりもコムミュニスト的である。

(一九五二・十二・三)